《道化とギナス》／《射的場と墓地》

――ボードレール『パリの憂鬱』富永太郎訳稿の成立

松本雅弘

I　はじめに

富永太郎によるボードレール散文詩篇の翻訳は、この夭折詩人のいずれも没後刊行になる七冊の『富永太郎詩集』に収録されてきた[1]。詩集の構成、翻訳詩篇の詩集における位置、その排列は、それぞれの刊本において異なっているところもあり、それについてはすでに論じたことがあるが[2]、本文そのものについても各刊本間で異同が見られる。

本稿では、富永太郎が翻訳したボードレール散文詩九篇のうち、最初に翻訳された《道化とギナス》と《射的場と墓地》の二篇について、県立神奈川近代文学館所蔵富永太郎特別資料の自筆翻訳原稿を検討することによって、その翻訳の成り立ちの過程を示すとともに、刊行された『富永太郎詩集』諸版との異同を見ることにする。ここでは翻訳稿の原形態とそれに加えられたさまざまな改変、そして最終的に成った翻訳稿と諸刊本収録翻訳詩篇本文との異同を示すにとどめ、この初期のボードレール翻訳に関わる諸問題については稿を改めて論じることにする。

なお本稿を成すにあたって自筆翻訳原稿資料の使用を許可していただきました富永一矢氏、神奈川近代文学館にお礼申し上げます。

《道化とギナス》と《射的場と墓地》の二篇のそれぞれの翻訳草稿とそれに加えられた改変、また諸刊本との異同を提示するにあたっては、次のような形式・原則によることとする。

一、最初に翻訳草稿第一稿を、のちの参照の便宜のため各文の文頭に番号を付して、全文を掲げる。それに続けて、第一稿にほどこされた改変を、第二稿、第三稿[3]…として、改変部分のみ抄出して示すことにする。そして改変を経た訳稿での最終的な形を、翻訳稿最終形としてあらためて全文を掲げる。

二、第一稿において註記すべき事項については、「a、b、c…」を当該箇所に付して示し、必要に応じて説明を加える。

（例）　a　「増」の偏と旁の一部を書き、消して右に「ま」

三、第二稿以降の改変の提示については、冒頭に第一稿で付した文番号を置き、

〈文番号〉　〈改変前の語句〉→〈改変後の語句〉

の形式で、改変箇所を前後も含めて引用し、改変された語句を傍線で強調して提示する。改変を示す記号は用いず、必要に応じて「削除」・「付加」・「変更」・「移動」など具体的に記し、さらに必要な説明があればこれを加える。

（例）　1　何といふ素敵な日　→　何といふすばらしい日

四、本文の表記については、翻訳草稿の原文にしたがう。ただし、くずし書きされた仮名・漢字などいわゆる「くずし字」については、適宜表記を整えて示し、特別な理由のある場合を除いて一々断らない。また句読点（、　。）・鉤括弧（「　」）は、訳稿では原稿用紙の同じ一つの枡目に文字とともに書きこまれているが、富永太郎の書癖ともいうべきこれらについては、訳稿には従わず、慣用通り一字分のスペースをとることにする。

五、諸刊本と翻訳稿最終形との異同についても、右の訳稿の改変と同じ形式で示す。

これまで刊行された『富永太郎詩集』には、註1に記したように、『富永太郎詩集』（私家版、昭和二年）、『富永太郎詩集』（筑摩書房、昭和十六年）、『富永太郎詩集』（創元社、創元選書、昭和二十四年）、『富永太郎詩集』（創元社、創元文庫、昭和二十六年）、『定本　富永太郎詩集』（中央公論社、昭和四十六年）、『富永太郎詩畫集』（求龍堂、昭和四十七年）、『富永太郎詩集』（現代詩文庫、思潮社、昭和五十年）の七種があるが、大別すれば、私家版系と中央公論社版系の二系統がある。

このうち、後者の系統については、求龍堂版『富永太郎詩畫集』は画家として富永太郎が遺した美術作品を詩篇とともに収録した刊本で、その本文は前年刊行の中央公論社版『定本　富永太郎詩集』と同一であり、また思潮社現代詩文庫版『富永太郎詩集』も漢字に新字体が用いられていることを除けば中央公論社版と本文は同一であるので、この二つの刊本については、異同は示さず、その旨を記すことにする。

他方、私家版系については、さらに私家版と筑摩書房版・創元社版の二系統に分けられる。前者と後者の異同は多くはないが、筑摩書房版についても重複を厭わず翻訳稿最終形との異同を示すことにする。創元社版については、筑摩書房版との異同がある箇所についてのみ註記し、他は省略することとしてその旨を記すことにする。

なお、右にあげた改変・異同の記述について、若干の説明を補足する。

α　訳稿にほどこされた改変は、大別すれば、最初に翻訳がおこなわれた時に訳しながら同時におこなわれたと推定される即時的なもの、後からほどこされたと考えられる爾後的なもの、そのどちらかが不分明なもの、の三種類に分けられる。

訳しながらほどこされたと考えられる即時的な改変――たとえば語句を消したその次の枡目に新しい語句を記しているような改変、あるいは爾後的改変とおなじように、語句を消してその右側に新たに語句を記してはいるが、文意から見てこれを訳しながら同時におこなわれた改変とみなすのが妥当であるような場合――については、第一稿として全体の訳稿を示した後にまとめて、当該箇所にa、b、c…を付し、その改変の様態を註記する。

爾後的な改変については、明らかな時間経過が認められるものについては、第二稿、第三稿…としてその改変を示し、不分明なものについては、適宜いずれのばあいがより妥当かを判断して示し、また必要に応じて註記をほどこす。

β　漢字表記については、訳稿ではやや錯綜している。いわゆる正字体と略字体・俗字体が混用されているからである。もっとも、多くの場合、ひとつの漢字について両字体が混用されるというのではなく、ある漢字については正字体、ある漢字については略字体・俗字体というように用いられている。ただしひとつの訳稿のなかで二つの字体が用いられているような例外もある。また、漢字がいわゆるくずし字で書かれている場合もあり、字体が分かち難いことも多い。この漢字表記の字体の問題は、漢字か仮名かという選択とくらべれば、むしろ書癖ということにもかかわっているであろうから、さほど重要とはいえないかもしれない。いずれにせよ発表時には正字体に直されて印刷に付されていたはずだとも考えられよう（実際に、刊行本においてはそのような表記法がとられている）。したがって、漢字はすべていまでいう旧字体あるいは新字体のいずれかに統一して示すべきであろうが、できるだけ草稿通りという原則にしたがって、また詩人の書癖を知る便ともなることを考えて、翻訳草稿に読みとれる字体で記し、あえて統一をはかろうとはしなかった。

γ　刊本では、昭和二年の私家版『富永太郎詩集』以降、昭和四六年刊行の中央公論社版『定本　富永太郎詩集』まで、仮名文字は旧仮名遣い、漢字は旧字体が用いられており、普及版の思潮社現代詩文庫版『富永太郎詩集』（昭和五十年）では、仮名文字については旧仮名遣いをとり、漢字は新字体が用いられている。

Ⅱ　《道化とギナス》

〈発表誌〉なし
〈初　出〉私家版『富永太郎詩集』、昭和二年
〈翻訳草稿〉資料番号　t/110/00040158
〈用　紙〉原稿用紙「丸善特製　二」（25字×24行）、2枚
〈筆記用具〉ペン（ブルーブラック・インク）、赤鉛筆
〈註　記〉翻訳は第一行目から行を空けずに二枚にわたって記されている。すなわち、第一行目に四字下げで表題を記し、作者名を括弧内に入れて表題に続け、ついで行間を空けず、第二行目から訳文を記す。新しい段落は一字下げで始められ、句読点、鉤括弧は文字と同一の枡目に入れられている。
推敲は訳文を記したのと同じブルーブラック・インクのペン書きによるものと、赤鉛筆によるものの二種で、後に示すように、赤鉛筆による改変は二箇所である。
訳稿末尾に「二一、四、二七」と年月日の記入があり、西暦が用いられている。

【第一稿】

道化役と ギナス（ボオドレエル）

1何といふ素敵な日だ！ 2廣い公園は、愛神（アムール）の支配の下にある若者のやうに、太陽の輝く眼（まなこ）の下に悶絶してゐる。
3なべての物にあまねき此の恍惚を示す物音とてもない。4川さへも眠つたやうである。5人の世の祭とは遙かに異つてゐるこゝには靜

寂の大饗宴があるのだ。

6絶えず増しつゝある光が[a]ます[b]〳〵[c]物象[d]を輝かしてゐるやうだ。7上気した花は、其の[e]色の勢力で、[f]空の瑠璃色と競はうとする欲望に燃えてゐる。8そして熱は、香を目に見える様にして、烟の[g]やうに、かの天体の方へ立ち昇らせる。

9とはいへ、私はこの万有の快樂の中に、一つの悲[h]しんでゐる存在のあるのを知つてゐる。

10巨大なギナスの足許に、王様が「悔恨」や「倦怠」に悩まされるとき、彼等を笑はせるの[i]を務めとしてゐる、かの人工の馬鹿、有爲の道化の一人なるけば〳〵しい馬鹿げた衣を身に[j]纏ひ、鈴のついた帽子を戴いて、臺石の[k]もとにうづくまり、[l]涙に滿ちた眼で永遠の女神を見上げ[m]てゐる。

11かくて、彼の眼は云ふ――「私は愛と友情を奪はれた、人間の中で一ばん下等な、一ばん孤獨なものでございます。12この点では、動物の中の最も不完全なものにも劣つて居ります。13それでも[n]――私でもやはり永遠の美を味ひ、感ずるやうに造られて居るのです。14あゝ、女神さま！　私の悲しみと熱狂とを憐んで下さいまし。」

15併し假借することを知らぬギ[o]ナスは、その大理石の眼で、どこか遠くの[p]方を眺めてゐる。

16　[q]二一・四・二七・

a　「増」の偏と旁の一部を書き、消して右に「ま」

b　「くの字点」を一枡に書き、消さずにその上から二枡を使って新たに「くの字点」を重ね書き

c　「物」と書いて消し、次の枡目に同じく「物」

d　「の」（？）と書き、消して右に「を」

e　漢字（不明）の一部を書きかけて消し、右に「色」

f　「太陽の」を消し、次の枡目から「空の」

g　「様」の偏と旁の上の部分を書きかけて消し、右に「や」

h　「ん」と書き、消して右に「し」

i　「が」と書いて消し、次の枡目に「を」

j　最初「着けて」と書き、消して右に「まとひ」と書いたのを再度消して次の枡目に「纏ひ」

k　「許」の偏を書きかけて消し、右に同じ枡内に「も」

l　「永遠の女神」と書いて消し、次の枡目につづけて「涙」

m　「なが」と書き、消して右に「てゐる。」

n　読点「、」を打ち、抹消して次の枡目に「――」

o　片仮名（？）一文字（不明）を消して右に「ナ」

p　「方」に付されたルビは、インクの濃淡から判断して第二稿における改変とも考えられる。

q　この年月日の記入は、インクの濃淡から判断して第二稿における付加とも考えられる。

【第二稿】（第一稿へのブルーブラック・インクによる訂正）

表題　道化役とギナス（ポオドレエル）
　↓　道化とギナス（凹里の憂鬱才七）

1　何といふ素敵な日　↓　何といふすばらしい日

2　廣い公園　↓　廣大な公園

2　太陽の輝く眼　↓　太陽のぎら〳〵した眼

3　此の悦惚を示す物音とてもない。
　↓　此の有頂天を示す物音とてはない。

4　川さへも眠つた　↓　河の水さへ眠つた

5　人の世の祭　↓　こゝには人の世の祭［後出語句の移動・付加］

5　遙かに異つてゐるこゝには靜寂の大饗宴
　↓　遙かに違つてゐるこゝには靜寂の大饗宴
6　絶えず増しつゝある光が　↓　不斷に増しつゝある光*は
　*「が」・「は」で迷った跡あり、まず「が」を消し、右に「は」と書いて消し、その上に「が」と書き、さらにこれを消して枡目左に「は」
6　物象を輝かしてゐるやうだ　↓　物象を輝かせてゐるやうだ
7　色の勢力で　↓　色の勢力を
8　目に見える樣にして　↓　目に見える*ものにして
　*まず「ものと」と直し、ついで「と」を消して「に」と書き、「ものに」
8　かの天体の方へ立ち昇らせる。
　↓　かの天体の方へと立ち昇らせてゐる。
10　王樣が　↓　王達が
10　務めとしてゐる　↓　務めとする
10　有爲の道化の一人なる　↓　故意の道化の一人*が
　*「なる」を消し、右に「が、」と訂正されており、新しい枡目に書かれているのではないが、文意の通りからいって、第一稿での訂正と見ることもできるかもしれない。
10　鈴のついた帽子　↓　鈴附き帽子
11　愛と友情を奪はれた　↓　愛と友情とを奪はれた
12　この点では、動物　↓　この点では、私は動物
13　永遠の美を味ひ、感ずるやうに
　↓　永遠の美を味はつたり、感じたりするやうに
15　併し假借する　↓　しかし假借する
15　どこが遠くの方を眺めて　↓　どこども知れぬ遠い方を眺めて

【第三稿】（第二稿への赤鉛筆による訂正）
10　鈴附き帽子　↓　鈴附き*の角形帽子
　*まず「附き」に続けて「の角形の」と赤鉛筆で付加したのち、同じく赤鉛筆で「の」を削除
15　眼で、どこども知れぬ遠い方
　↓　眼で、私にはどこども知れぬ遠い方

【翻訳最終稿】（第三稿での改変を経て成立した《道化とギナス》訳稿の全文）

道化とギナス（巴里の憂鬱第七）

1何といふすばらしい日だ！　2廣大な公園は、愛神（アムール）の支配の下にある若者のやうに、太陽のぎら〳〵した眼（まなこ）の下に悶絶してゐる。3なべての物にあまねき此の有頂天を示す物音とてはない。4河の水さへ眠つたやうである。5こゝには人の世の祭とは遙かに事かはつた、靜寂の大饗宴があるのだ。

6不斷に増しつゝある光はます〳〵物象を輝かせてゐるやうだ。7上気した花は、其の色の勢力（ほのほ）を、空の瑠璃色と競はうとする欲望に燃えてゐる。8そして熱は、香を目に見えるものにして、烟のやうに、かの天體の方へと立ち昇らせてゐる。

9とはいへ、私はこの万有の快樂の中に、一つの悲しんでゐる存在のあるのを知つてゐる。

10巨大なギナスの足許に、王達が「悔恨」や「倦怠」に惱まされるとき、彼等を笑はせるのを務めとする、かの人工の馬鹿、故意の道化の一人が、けば〳〵しい馬鹿げた衣（ころも）を身に纏ひ、鈴附きの角形帽

子を戴いて、臺石のもとにうづくまり、涙に滿ちた眼で永遠の女神を見上げてゐる。

11かくて、彼の眼は云ふ――「私は愛と友情とを奪はれた、人間の中で一ばん下等な、一ばん孤獨なものでございます。12この点では、私は動物の中の最も不完全なものにも劣つて居ります。13それでも――私でもやはり永遠の美を味はつたり、感じたりするやうに造られて居るのです。14あゝ、女神さま！　私の悲しみと熱狂とを憐んで下さいまし。」

15しかし假借することを知らぬギナスは、その大理石の眼で、私にはどことも知れぬ遠い方を眺めてゐる。

16　二一・四・二七.

この翻訳はすでに述べたように生前発表されることはなく、はじめて公刊されたのは私家版『富永太郎詩集』（第一書房、昭和二年）においてであった。それ以降、思潮社版『富永太郎詩集』（昭和五〇年）まで七冊の『詩集』に収録されたが、それぞれ右の翻訳最終稿とは若干の異同が見られる。以下、翻訳最終稿との異同を示すことにする。

一、『富永太郎詩集』（家蔵版（私家版）、昭和二年）

表題　道化とギナス（巴里の憂鬱第七）
　↓　道化とギナス（ボオドレエル）
2　太陽のぎら〳〵した眼　↓　太陽のぎらぎらした眼
5　こゝには人の世　↓　ここには人の世
6　増しつゝある光はます〳〵物象を
　↓　増しつつある光はますます物象を
9　この万有の快樂　↓　この萬有の快樂
10　巨大な井ナス　↓　巨大な井ナス
10　けば〳〵しい　↓　けばけばしい
10　身に纏ひ　↓　身に纏ひ　〔ルビ付加〕
10　鈴附きの角形帽子　↓　鈴附き帽子
12　この点では　↓　この點では
14　あゝ！女神さま！　↓　ああ、女神さま！
15　知らぬ井ナスは　↓　知らぬ井ナス
15　眼で、私にはどことも知れぬ　↓　眼で、どことも知れぬ
16　二一・四・二七.　↓　〔年月日削除〕

二、『富永太郎詩集』（筑摩書房、昭和十六年）

表題　道化とギナス（巴里の憂鬱第七）
　↓　道化とギナス（ボオドレエル）
2　太陽のぎら〳〵した眼　↓　太陽のぎらぎらした眼
5　こゝには人の世　↓　ここには人の世
6　増しつゝある光はます〳〵物象を
　↓　増しつつある光はますます物象を
8　熱は、香を目に見える　↓　熱は、香を目に見える
　〔ルビの変更〕
9　この万有の快樂　↓　この萬有の快樂
10　けば〳〵しい　↓　けばけばしい
10　身に纏ひ　↓　身に纏ひ　〔ルビ付加〕
10　鈴附きの角形帽子　↓　鈴附き帽子
11　彼の眼は云ふ　↓　彼の眼は云ふ　〔ルビ削除〕

12　この点では　→　この點では
14　あゝ、女神さま！　→　ああ、女神さま！
15　眼で、私にはどことも知れぬ　→　眼で、どことも知れぬ
16　二一・四・二七　→　［年月日削除］

訳稿最終稿との異同は、私家版『富永太郎詩集』と次の四点を除いて同じ。すなわち、

文8の「香」のルビ変更、
文10、15の「ギナス」の表記、
文11の「眼」のルビ削除、である。

三、『富永太郎詩集』（創元社、創元選書、昭和二十四年、創元文庫、昭和二十六年）

訳稿最終稿との異同は、以下のように翻訳最終稿末尾の年月日が一部表記を変更して残されたことを除いては、筑摩書房版『富永太郎詩集』と同じ。

16　二一・四・二七　→　二一・四・二七

四、『定本　富永太郎詩集』（中央公論社、昭和四十六年）

表題　道化とギナス（巴里の憂鬱第七）
　　→　道化とギナス　　ボードレール*

*作者名は表題の下に括弧内に入れず、二字分を残して下に寄せて置かれる。

5　こゝには人の世　→　ここには人の世
8　熱は、香を目に見える
　　→　熱は、香を目に見える　〔ルビの変更〕
9　この万有の快樂　→　この萬有の快樂
10　身に纏ひ　→　身に纏ひ　〔ルビ付加〕
11　彼の眼は云ふ　→　彼の眼は云ふ　〔ルビ削除〕
12　この点では　→　この點では
16　二一・四・二七　→　［年月日削除］

すなわち、他の刊本とくらべて、以下の六点が訳稿最終稿に戻されている。

2　太陽のぎら〳〵した眼
6　増しつゝある光はます〳〵物象を
10　けば〳〵しい
10　鈴附きの角形帽子
14　あゝ、女神さま！
15　眼で、私にはどことも知れぬ

五、『富永太郎詩集』（現代詩文庫、思潮社、昭和五十年）

漢字がすべて新字体に統一されていることを除けば、『定本　富永太郎詩集』（中央公論社、昭和四十六年）と異同は同じ。

Ⅲ　《射的場と墓地》

〈発表誌〉なし
〈初　出〉私家版『富永太郎詩集』、昭和二年
〈翻訳草稿〉資料番号　U/110/00040159
〈用　紙〉原稿用紙「丸善特製　二」（25字×24行）2枚
〈筆記用具〉ペン（ブルーブラック・インク）、赤鉛筆
〈註　記〉翻訳は、《道化とギナス》の訳稿と同じく、第一行目から行を空けずに二枚に書かれている。表題は第一行目に三字下げで記され、詩集名・排列番号を括弧内に入れて表題に続け、ついで行間を空けず、第二行目から訳文が始められる。段落開始の一字下げ、句読点・鉤括弧の文字と同一枡目内記入なども同様である。

原稿用紙欄外に三箇所書き込みがある。まず第一に、原稿用紙一枚目右上欄外（原稿用紙三行目から九・十行目の間にかけての範囲）に《*le raffinement profond*》と筆記体で記され、《*raffinement*》一語のみ一本線で囲われている。第二に、同じく原稿用紙一枚目左上欄外（原稿用紙左側二行目から四行目の間にかけての範囲）に弧形の記号が書き込まれ、三行目欄外上部に「×」印が記されている。第三に、原稿用紙二枚目右上欄外（原稿用紙二行目から六行目の間にかけての範囲）に《*morels impatients*》と筆記体で記され、全体に下線がほどこされている。

推敲の筆記具が訳文と同じブルーブラック・インクのペン書きによるものと赤鉛筆によるものの二種であるのも《道化とギナス》訳稿と同じ。赤鉛筆による改変は後に示すように五箇所である。

訳稿末尾には「二二、五、一」と年月日が西暦で記入されているのも《道化とギナス》と同様である。

射的場と墓地（巴里の憂鬱才四十五）

1墓地見[a]晴し御休処（やすみどころ）――「妙な看板だな」[b]――と我が散策者は獨言つた――2「それにしても、あれを見ると喉が渇く様に出來てゐる！　3こゝの主人は、きつとオラースや、エピキユールの弟子の詩人たちぐらゐは分つてゐるにちがひない。4事（しゝ）によつたら、骸骨か、さうでなくても人生のはかなさを示す何かの徴がなければ宴會が出來なかつた、古代[c]埃及人の深淵な理屈を知[d]つてゐる[e]かもしれない。」

5彼は入つて行つて、墓地に向つて一杯のビールをのみ、それからゆつくりとシガーを一本[f]吸つた。6すると、幻想が彼を駆つて墓地の中へ行かせた。7そこの草は、そんなに丈高く、そんなに人を誘ふやうだつたのだ、そこには、そんなに豊満な太陽が[g]權威を振つてゐたのだ。

8実際光と熱とは猛烈を極めたものであつた。9まるで陶酔した太陽が、破壊作用の為に肥え[h]太つた、すばらしい花の絨毛の上をのたうち廻つてゐるやうであつた。

10おびたゞしい生命のさゝやきが空中を満たしてゐた――限りなく微細なものゝ生命[i]の[j]囁きが空中を満してゐた――ひそやかなシンフォニーのざわめきの中に、丁度シャンパンの栓が抜けるやうな音を立てゝ、[k]一定の合ひ間をおいて隣りの射的場から響いて來る小銃の音に切られて。

11忽ち、彼は彼の脳髄を燃え立たせてゐる太陽の下に、「死」の[l]臭ひで一杯満ち満ちてゐる大気の中に、彼の坐つてゐる墓（まと）の下でさゝやく聲を聞いた。12[m]その聲は云つた、13「お前の[n]標的も小銃も呪はれろ、14[o]地下（いきもの）のものと、其の神聖な休息とのことを少しも考へぬ、騒々しい[p]生物よ！　15お前の野心も、計畫も呪はれてあれ、

16『死』の[q]聖殿の側に、殺人の術を學ばうとする我慢のならぬ人間よ！ [17r]如何に報酬が得易いか、如何に目的が達し易いか、また[s]『死』を除いては、すべてが如何に空しいものだかを知つたら、お前等はそんなに疲れきりはしなからうに、勤勉な生物よ、[t]そしてずつと以前に『目的』に達して――獣ふべき人生の唯一の眞實の目的に達してゐる人達の眠りをそんなに度々妨げることはなからうに。」[18]

二二、五、一、

a 「晴」枡目左上、「し」桝目右下に文字の一部か記号の消された跡
b 鉤括弧と「――」の間に文字の一部か記号の消された跡
c 一文字（「埃」の書き損じか）消し、右に「埃」
d 一文字（不明）の書きかけを消し、右に「つ」
e 「知」の偏を書きかけて消し、右に「し」
f 「や」を書きかけて消し、右に「吸」
g 「支配して＊（一字不明、「ゐ」の書きかけか）」を消し、次の桝目から「權威を」
h 「た」を消し、右に「太」
i 「生命」のあと「――」を書き、これを消して次の桝目に「の」
j 「の」のあと、「さゝ」と書き、これを消して次の桝目から「囁き」
k 最初「音を立てゝ隣りの射的場」と書いたあと、右横に挿入記号をつけて「一定の合ひ間をおいて」を付加。
l 「香り」を消し、次の桝目から「臭ひ」
m 始め鉤括弧（「）を書きかけて消し、同じ枡目に「そ」
n 一文字（不明）の書きかけを消し、次の桝目から「標的」
o 「呪われろ、」に続けて「死んだものゝことも」と書いたあと、これを消し、次の桝目から「地下のもの」
p 「生き物」の「き」を消し、「生物」とし、ルビ「いきもの」を付加
q 一文字（「霊」の書きかけか）の上に重ね書きして「聖」
r 「死」の他には」を消し、次の枡目から「如何に」
s 一文字（不明）の書きかけを消し、次の桝目から「『死』」
t 一文字（不明）消し、次の桝目から「そして」

【第二稿】（第一稿へのブルーブラック・インクによる訂正）

2 あれを見ると喉が渇く　↓　あれを見ると実際喉が渇く
3 こゝの主人は、きつとオラース
↓　きつとこゝの主人は、オラース
3 詩人たちぐらゐは分つてゐる
↓　詩人たちぐらゐは解つてゐる
4 骸骨か、さうでなくても人生の　↓　骸骨か、何か人生の
4 示す何かの徴がなければ宴會　↓　示す徴がなくては宴會
6 墓地の中へ行かせた　↓　墓地の中へと降りて行かせた
7 そんなに丈高く　↓　そんなに丈が高く
10 生命のさゝやきが空中を満たしてゐた――限りなく
↓　生命の囁きが――限りなく
10 囁きが空中を満してゐた　↓　囁きが空中を満たしてゐた
10 小銃の音に切られて。
↓　小銃の音が一定の合ひ間ごとにそれを断ち切つてゐた。

＊第10文の後半は、四つの推敲段階を経ている。

①「丁度シャンパンの栓が抜けるやうな音をたてゝ、一定の合ひ間をおいて隣りの射的場から響いて來る小銃の音に切られて。」
②「丁度シャンパンの栓が抜けるやうな音をたてゝ、一定の合ひ間毎に隣りの射的場から響いて來る小銃の音に切られて。」
③「丁度シャンパンの栓が抜けるやうな音をたてゝ、隣りの射的場から響いて來る小銃の音が一定の合ひ間ごとにそれを断ち切つた。」
④「丁度シャンパンの栓が抜けるやうな音をたてゝ、隣りの射的場から響いて來る小銃の音が一定の合ひ間ごとにそれを断ち切つてゐた。」

11 太陽の下に、「死」の臭ひ
11 ↓ 太陽の下に、焼けつくやうな「死」の臭ひ
11 「死」の臭ひで一杯満ち満ちてゐる
11 ↓ 「死」の臭ひに満ちてゐる
12 お前の標的も ↓ 汝の標的も ↓ お前達の標的も
13 小銃も呪はれろ
↓ 小銃も呪はれてあれ
↓ 小銃も呪はれろ
15 お前の野心も ↓ 汝の野心も ↓ お前達の野心も
15 計畫も呪はれてあれ ↓ 計畫も呪はれろ
16 聖殿の側に ↓ 聖殿の側で
16 我慢のならぬ人間よ！ ↓ 我慢のならぬ人間共よ！
17 空しいものだかを知つたら ↓ 空しいものだかを知つたなら
17 お前等はそんなに ↓ お前達はそんなに
17 疲れきりはしなからうに ↓ 疲れきってはゐなからうに
17 「目的」に達して
↓ 「目的」を、
↓ 「目的」に、
↓ 「目的」を、
17 人生の唯一の ↓ 人生の唯だ一つの
17 眞實の目的に達してゐる ↓ 眞實の目的を達してゐる
17 眠りをそんなに ↓ 眠りをこんなに

【第三稿】（第二稿への赤鉛筆による訂正）

4 古代埃及人の深淵な理屈を知つてゐるかもしれない
↓ 古代埃及人程凝り性なのかもしれない
↓ 古代埃及人程*ひどく凝り性なのかもしれない
*赤鉛筆で書かれた二文字（不明）を同じく赤鉛筆で消して下に「ひどく」と書き、これを挿入記号で「程」と「凝り性」の間に入れる指示
8 実際光と熱とは猛烈を極めたものであつた
↓ 実際光と熱とは其処を煮えくり返して居た
9 肥え太つた、すばらしい ↓ 肥え太つた太陽が、すばらしい
9 のたうち廻つてゐるやうであつた。／おびたゞしい
↓ のたうち廻つてゐるやうであつた。おびたゞしい
［改行から改行なしの追い込みへ］
11 忽ち、彼は ↓ 此の時、彼は
*「忽ち」を消さずに右横に赤鉛筆で四文字の代わりの訳語（不明）が記されたのを同じく赤鉛筆でほぼ塗りつぶすように消したあと、「忽ち」の左横に赤鉛筆で「此の時」。「忽ち」と「此の時」は並列された形となり、いずれかの選択は未定のまま残されているように見える。
17 妨げることはなからうに。」 ↓ 妨げることはなからうに！」

【翻訳最終稿】（第三稿での改変を経て成立した《射的場と墓地》訳稿の全文）

射的場と墓地（巴里の憂鬱才四十五）

1墓地見晴し御休處（やすみどころ）――「妙な看板だな」――と我が散策者は獨言つた――2「それにしても、あれを見ると実際喉が渇く様に出來てゐる！　3きつとこゝの主人は、オラースや、エピキュールの弟子の詩人たちぐらゐは解つてゐるにちがひない。4事によつたら、骸骨か、何か人生のはかなさを示す徴（しるし）がなくては宴會が出來なかつた、古代埃及人程ひどく凝り性なのかもしれない。」

5彼は入つて行つて、墓地に向つて一杯のビールをのみ、それからゆつくりとシガーを一本吸つた。6すると、幻想が彼を駆つて墓地の中へと降りて行かせた。7そこの草は、そんなに丈が高く、そんなに人を誘ふやうだつたのだ、そこには、そんなに豊満な太陽が權威を振つてゐたのだ。

8実際光と熱とは其処を煮えくり返して居た。9まるで陶酔した太陽が、破壊作用の為に肥え太つた太陽が、すばらしい花の絨氈の上をのたうち廻つてゐるやうであつた。10おびたゞしい生命の囁きが――限りなく微細なものゝ生命の囁きが空中を満たしてゐた――ひそやかなシンフォニーのざわめきの中に、丁度シャンパンの栓が抜けるやうな音を立てゝ、隣りの射的場から響いて來る小銃の音が、一定の合ひ間ごとにそれを断ち切つてゐた。

11此の時、彼は彼の脳髄を燃え立たせてゐる太陽の下に、焼けつくやうな「死」の臭ひに満ちてゐる大気の中に、彼の坐つてゐる墓の下でさゝやく聲を聞いた。12その聲は云つた、13「お前達の標的（まと）も小銃も呪はれろ、14地下のものと、其の神聖な休息とのことを少しも考へぬ、騒々しい生物（いきもの）よ！　15お前達の野心も、計畫も呪はれろ、16『死』の聖殿（みや）の側で、殺人の術を學ばうとする我慢のならぬ人間共よ！17如何に報酬が得易いか、如何に目的が達し易いか、また『死』を除いては、すべてが如何に空しいものだかを知つたなら、お前達はそんなに疲れきつてはゐなからうに、勤勉な生物（いきもの）よ、そしてずつと以前に『目的』を――厭ふべき人生の唯だ一つの眞實の目的を達してゐる人達の眠りをこんなに度々妨げることはなからうに！」18

二二．五．一．

この翻訳はすでに述べたように生前発表されることはなく、はじめて公刊されたのは私家版『富永太郎詩集』（第一書房、昭和二年）においてであったこと、また、それ以降、思潮社版『富永太郎詩集』（昭和五〇年）まで七冊の『詩集』に収録されたが、それぞれ右の翻訳最終稿とは若干の異同が見られること、《道化とギナス》と同様である。以下、翻訳最終稿との異同を示すことにする。

一、『富永太郎詩集』（私家版、昭和二年）

表題　射的場と墓地（巴里の憂鬱才四十五）
　　↓　射的場と墓地（ボオドレエル）
1　墓地見晴し御休（やすみどころ）處　↓　墓地見晴し御休（やすみどころ）處
2　あれを見ると実際　↓　あれを見ると實際
4　古代埃及人程ひどく凝り性なのかもしれない
　　↓　古代埃及人の深淵な理屈を知つてゐるかもしれない
5　ゆつくりとシガーを　↓　ゆつくりシガーを
6　幻想が彼を駆つて　↓　幻想が彼を駆つて

7　そんなに豊満な太陽　↓　そんなに豊満な太陽
8　実際光と熱とは其処を煮えくり返して居た
　↓　實際光と熱とは猛烈を極めたものであつた
9　破壊作用の為に肥え太つた太陽が、すばらしい花
　↓　破壊作用の爲に肥え太つた、すばらしい花
10　微細なものゝ生命　↓　微細なものの生命
10　空中を滿たしてゐた　↓　空中を滿たしてゐた
10　音を立てゝ、隣り　↓　音をたてて、隣り
10　それを斷ち切つてゐた　↓　それを斷ち切つてゐた
11　此の時、彼は　↓　忽ち、彼は
11　臭ひに滿ちてゐる大気の　↓　臭ひに滿ちてゐる大氣の
11　さゝやく聲を　↓　ささやく聲を
16　我慢のならぬ人間共よ！　如何に
　↓　我慢のならぬ人間どもよ！／　如何に
　［改行なしから改行へ］
17　こんなに度々妨げる　↓　こんなに屢々妨げる
18　二二、五、一、　↓　［年月日削除］

二、『富永太郎詩集』（筑摩書房、昭和十六年）

表題　射的場と墓地（巴里の憂鬱オ四十五）
　↓　射的場と墓地（ボオドレエル）
1　墓地見晴し御休處（やすみどころ）　↓　墓地見晴し御休處
2　あれを見ると実際　↓　あれを見ると實際
4　古代埃及人程ひどく凝り性なのかもしれない
　↓　古代埃及人の深淵な理屈を知つてゐるかもしれない
5　ゆつくりとシガーを　↓　ゆつくりシガーを
6　幻想が彼を駆つて　↓　幻想が彼を驅つて
7　そんなに豊満な太陽　↓　そんなに豊滿な太陽
7　權威を振つてゐた　↓　權威を振るつてゐた
8　実際光と熱とは其処を煮えくり返して居た
　↓　實際光と熱とは猛烈を極めたものであつた
9　破壊作用の為に肥え太つた太陽が、すばらしい花の絨毯
　↓　破壊作用の爲に肥え太つた、すばらしい花の絨毯
10　微細なものゝ生命　↓　微細なものの生命
10　空中を滿たしてゐた　↓　空中を滿たしてゐた
10　音を立てゝ、隣り　↓　音をたてて、隣り
10　それを斷ち切つてゐた　↓　それを斷ち切つてゐた
11　此の時、彼は　↓　忽ち、彼は
11　臭ひに滿ちてゐる大気の　↓　臭ひに滿ちてゐる大氣の
11　さゝやく聲を　↓　ささやく聲を
16　我慢のならぬ人間共よ！　如何に
　↓　我慢のならぬ人間どもよ！／　如何に
　［改行なしから改行へ］
17　こんなに度々妨げる　↓　こんなに屢々妨げる
18　二二、五、一、　↓　［年月日削除］

訳稿最終稿との異同は、私家版『富永太郎詩集』と次の二点を除いて同じ。
文7　「權威を振るつてゐた」の振り仮名の追加
文9　「絨毯」→「絨毯」の訳語変更

三、『富永太郎詩集』（創元社、創元選書、昭和二十四年、創元文庫、昭和二十六年）

訳稿最終稿との異同は、以下のように訳稿末尾の年月日が一部表記を変更して残されたことと、句読点の変更以外は、筑摩書房版『富永太郎詩集』と同じ。

7　人を誘ふやうだつたのだ、そこには
　↓　人を誘ふやうだつたのだ。そこには
17　勤勉な生物よ　↓　勤勉な、生物よ
　＊この読点の追加は選書版にはなく、文庫版のみである。
18　二二・五・一　↓　二二・五・一

四、『定本　富永太郎詩集』（中央公論社、昭和四十六年）

表題　射的場と墓地（巴里の憂鬱オ四十五）
　↓　射的場と墓地　ボードレール
1　墓地見晴し御休處　↓　墓地見晴し御休處
2　あれを見ると実際　↓　あれを見ると實際
6　幻想が彼を駆つて　↓　幻想が彼を駆つて
7　そんなに豊満な太陽　↓　そんなに豊満な太陽
8　実際光と熱とは其処を煮えくり返して居た
　↓　實際光と熱とは其處を煮えくり返して居た
9　破壊作用の為に　↓　破壊作用の爲に
9　すばらしい花の絨毯　↓　すばらしい花の絨毯
10　空中を満たしてゐた　↓　空中を滿たしてゐた
10　音を立てゝ、隣り　↓　音をたてゝ、隣り
10　それを断ち切つてゐた　↓　それを斷ち切つてゐた
11　臭ひに満ちてゐる大気の　↓　臭ひに滿ちてゐる大氣の
18　二二・五・一　↓　［年月日削除］

すなわち、他の刊本とくらべて、以下の十点が訳稿最終稿に戻されている。

4　古代埃及人程ひどく凝り性なのかもしれない
5　ゆつくりとシガーを
7　權威を振つてゐた
8　光と熱とは其處を煮えくり返して居た
　［「其処」→「其處」の表記は変更）］
9　肥え太つた太陽が、すばらしい花
10　微細なものゝ生命
11　此の時、彼は
11　さゝやく聲を
16　我慢のならぬ人間共よ！　如何に　［改行なし］
17　こんなに度々妨げる

五、『富永太郎詩集』（現代詩文庫、思潮社、昭和五十年）

漢字がすべて新字体に統一されていることを除けば、『定本　富永太郎詩集』（中央公論社、昭和四十六年）と異同は同じ。

註

1　『富永太郎詩集』（私家版、昭和二年）、『富永太郎詩集』（筑摩書房、昭和十六年）、『富永太郎詩集』（創元社、創元選書、昭和二十四年）、『富永太郎詩集』（創元社、創元文庫、昭和二十六年）、『定本　富永太郎詩集』（中央公論社、昭和四十六年）、『富永太郎詩集集』（求龍堂、昭和四十七年）、『富永太郎詩集』（現代詩文庫、思潮社、昭和五十年）。編者は、私家版『富永太郎詩集』は村井康男、筑摩書房版『富永太郎詩集』は富永次郎、それ以降は大岡昇平である。

2　「外套と聖盒――ボードレール〈或るまどんなに〉富永太郎訳をめぐって――」、『鳥取大学　大学教育支援機構教育センター紀要』第七号（平成二十二年十二月）参照。

3　もっとも、本稿で対象とする〈道化とギナス〉と〈射的場と墓地〉の二篇については、訳稿は、それぞれ最初に翻訳が書き記された原稿用紙に付加・削除等の改変がほどこされていったもので、原稿用紙を改めて新たな訳稿が作成されたのではないから、「第一稿」、「第二稿」…というような言い方は厳密にいえば適当ではないだろう。むしろ「第一形」あるいは「第一（次）状態・形態」…というような表現で示す方がより適切かもしれないが、本稿では「草稿」の語感を残す「第一稿」、「第二稿」…という呼称を用いることにする。

4　大岡昇平は、前掲『定本　富永太郎詩集』末尾の「注と異文」において、この原稿用紙について次のように註している。「洋書輸入商「丸善株式会社」販売の原稿用紙。左下欄外に「丸善特製二」と印刷されているもの。「二」は製品番号。12×25×2＝600字詰、二五・八×三五・〇センチ。セピア罫、周囲を子持ち罫で囲む」（『定本　富永太郎詩集』、一四五頁）。